

第1号

2014年
6月発行

CONTENTS

日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築事業について

②～③

国際共同研究
ネットワークの構築について

④～⑤

日本語の歴史的典籍
データベースの構築について

⑤～⑥

古典籍共同研究
事業センター紹介

⑥～⑦

表紙紹介

⑦

トピックス

⑧

ふみ

古典籍共同研究
事業センターニュース大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

ご挨拶

国文学研究資料館長
古典籍共同研究事業センター長

今西 祐一郎

平成22年に日本学術会議によって学術の
大型計画の一つとして認められ、提言された

「日本語の歴史的典籍のデータベース構築計画」につき、
実施機関である国文学研究資料館は、平成25年度の準備
経費の措置を経て、このたび平成26年4月より、我が国
人文社会科学分野では初めての「大規模学術フロンティア
促進事業」として、本格的な開始の運びとなりました。

その間、様々なご助言ご支援をたまわった文部科学
省、文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環
境基盤部会をはじめ、研究者コミュニティ関係各位、ま
たこの大型計画を拠点として支えてくださることに
なった内外の大学および図書館関係各位に、御礼申し

上げます。

なお、平成26年度概算要求に際しては、計画の見直し
を行い、本事業をデータベース構築だけに終わらせず、
データベースを資源とする、日本古典籍の国際共同研
究ネットワーク構築をめざすことになりました。

このことは、創設以来、法令にうたわれた設置目的に
沿って、国文学資料を中心に調査、マイクロフィルム収
集、研究を行ってきた国文学研究資料館にとっては、大
きな発展を意味します。

折しも国立大学法人とならんで私どもの所属する大
学共同利用機関法人にも、「ミッションの再定義」、「第
3期中期目標・中期計画」の策定が課せられています。
国文学研究資料館は、今回の計画をその双方に深く関
わる事業として位置づけ、取り組んでいく所存です。

本計画の進展状況につきましては、今後、年数回、こ
のニューズレターにてその概要を報告いたします。関
係各位のご助言、ご支援をお願い申し上げます。

日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業について

古典籍共同研究事業センター副センター長 山本和明

国文学研究資料館では、平成26年度から日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業を開始しました。この事業はいつたどのようなものなのか、事業開始に至った経緯と概要をご紹介します。

1 事業開始までの経緯

①日本学術会議のマスタープランとして策定

日本学術会議から、平成22年3月に、学術の大型施設計画・大規模研究計画（マスタープラン）が示されました。これは、国として今後推進すべき研究の基本計画を提案したものです。近年のめまぐるしい社会環境の変化のなかで、新たな「知」を創造する必要性が、様々な分野で増大し、従来にはない大規模かつ計画的な研究を展開していく必要が生じてきたのです。平成23年、平成26年にもマスタープランが公表されていますが、そのいずれにおいても、「日本語の歴史的典籍に関するデータベース構築計画」が、推進すべき大型研究計画のひとつとしてリストアップされました。

「日本語の歴史的典籍に関するデータベース」とはいつたどのようなものなのか、それを解く鍵は、同じ頃に日本学術会議「日本の展望委員会 人文・社会科学作業分科会」のとりまとめにより公表された「日本の展望―人文・社会科学からの提言」（平成22年4月）にあります。この提言では、人文・社会科学

学という学術分野が、社会に対しどのような課題や展望を持つて研究を推進しているかを問うており、また、同時に公表された言語・文学委員会の報告では、現在の日本社会における問題として「日本語と日本語を取り巻く状況の変化」があり、「日本語の過去の文字記録や方言の記録の保存体勢の不在は、日本文化の根幹を揺るがしかねない」とされています。そうした「保存体制の不在」に対応することが、「喫緊の課題であり、国家的レベルでの対処が不可欠である」と、その課題の重要性を唱えているのです。具体的に示された提案として、「日本語のデータベースの構築」があり、「江戸期以前の日本語典籍のアーカイブ化」が挙げられました。日本の文化の宝庫とも言える古典籍の内容を、この社会のめまぐるしい変化の時代に保存・継承し、後世へと伝え、活用していくことが私たちの務めと言えます。そのためにも、各地に所蔵される古典籍をデータ化し、集約することが求められています。

これらの動きを受け、日本語の歴史的典籍に関するデータベースの構築を目指し、国文学研究資料館において検討が始まり、平成25年度にはその構築のための準備経費が認められたのです。

②事業開始の準備段階

この事業の準備のため、国文学研究資料館では、詳細の検討を進めてまいりました。連携して事業を推進することとなった国内外の大学や研究者コミュニティとの協議を積み重ねていく過程で、データベースの構築だけではなく、人文学系の研究方法の革新をも目指した国際共同研究ネットワーク構築計画へと発展的に事業を展開することになったのです。

2 実施内容

それでは、以下、簡略に事業期間（及び事業総額）と現段階での実施体制についてご紹介します。

①事業期間及び事業総額

事業期間：平成26年度～平成35年度
事業総額：88億円（平成25年度の準備経費を含む）

②実施体制

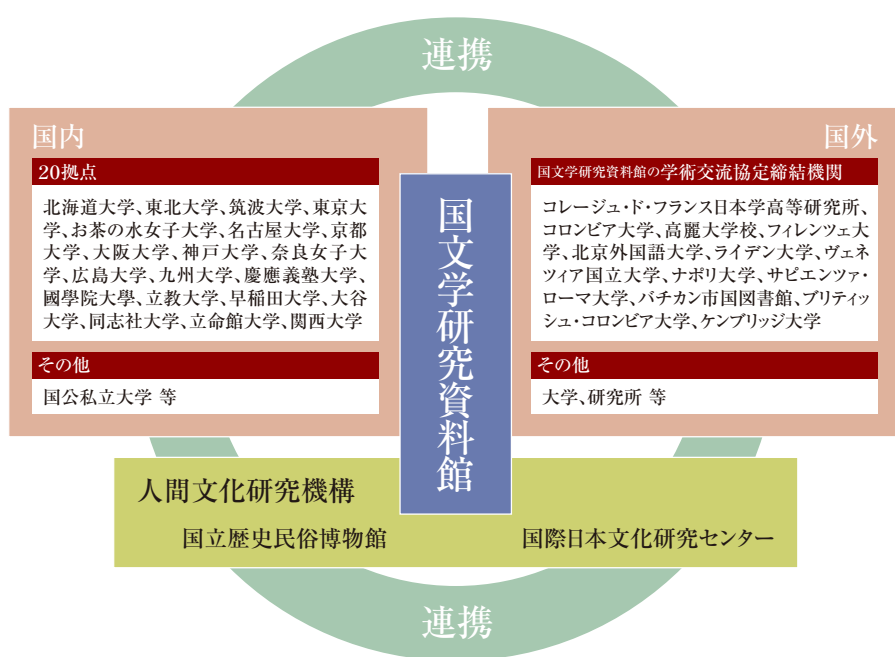
今回の事業は大規模であるため、国文学研究資料館だけではなく、国内外の大学、研究機関と協力し合って実施していきます。事業開始段階での体制は次のとおりです。今後、順次ネットワークを拡大していく予定です。

中心機関：国文学研究資料館

国内拠点：北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、お茶の水女子大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、奈良女子大学、広島大学、九州大学、慶應義塾大学、國學院大學、立教大学、早稲田大学、大谷大学、同志社大学、立命館大学、関西大学

海外拠点：コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所、コロンビア大学、高麗大学校、フイレンツェ大学、北京外国語大学、ライデン大学、ヴェネツィア国立大学、ナポリ大学、サピエンツァ・ローマ大学、バチカン市国図書館、ブリティッシュ・コロンビア大学、ケンブリッジ大学

国際共同研究ネットワークのイメージ



こうした機関と協力し合い、共同研究の成果などを広く社会へと伝えるために、今後様々な行事などを展開していきます。どうぞご期待ください。

国際共同研究ネットワークの構築について

国文学研究資料館副館長 谷川 恵一

1 目的

本事業が構築しようとしている日本の古典籍のデータベースは、あらゆる分野の古典籍を網羅的に集成し、それらを自由に閲覧し、研究に利用する学術基盤を整備しようとするものです。このような、古典籍を網羅したかつてない規模の図書館をネットワーク上に作り上げる取組とともに、本事業では、こうした巨大な古典籍の空間から新たな知の空間を創出することを目指して、国内外の多様な分野の研究者をつなぎ共同して研究を行ういくつか場を国際共同研究ネットワークとして整備していきます。

2 共同研究

本事業では、以下の4つのタイプの共同研究を、相互の連携を図りながら実施し、これらを通じて次世代の研究を主導する若手研究者を育成していきます。

① 国際共同研究

海外の研究者を中心に日本文化を総合的に研究するテーマに取り組み、日本古典籍を広い視野から活用する共同研究です。日本の古典籍は日本人だけのものではなく、世界の研究

者の研究対象となっています。幅広い研究者の国際学術交流により、古典籍を通じた日本再発見を目指します。

平成27年度から本研究の開始を予定しており、そのための準備研究を平成26年10月から実施します。

② 公募型共同研究

一般公募による共同研究です。平成26年度に第1回目の募集を行い、以降、毎年度募集していきます。平成27年度からは若手研究者を対象とした公募も実施予定です。

③ 拠点主導共同研究

国内拠点の研究者が研究代表者となり、拠点の研究者を中心に研究組織を構成して実施する共同研究です。

④ 機構内共同研究

人間文化研究機構内の国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター及び国文学研究資料館の3機関が連携して実施する共同研究です。各機関がもつ研究者ネットワークを活用しながら、共同研究を実施していきます。

国文学研究資料館が主導する共同研究は平成26年度から開始しており、当初3年間で実施する研究のテーマは次のとおりとなっています。

「総合書物学」

- ・アジアの中の日本古典籍―医学・理学・農学書を中心として―
- ・日本古典籍の書誌概念と書誌用語の国際化
- ・日本古典籍コードの国際標準化

「書物の文化学的研究」

- ・表記の文化学―ひらがなとカタカナ―

このほか、データベース構築にあたり、その検索機能の高度化を目指し、共同研究型の研究開発も実施します。

日本語の歴史的典籍データベースの構築について

古典籍共同研究事業センター副センター長

山本 和明

研究基盤として整備していく大規模なデータベースでは、国内の30万点にも及ぶ古典籍画像データの整備および公開をおこなっていきます。

国文学研究資料館では、書物の所在情報や著作・著者といった基本的な情報を記した書誌情報データベース「日本古典籍総合目録データベース」を公開してきました。このデータベースに、書物の全冊画像データを加え、歴史的典籍の学術研究に関

3 共同研究の目的と期待される成果

これらの共同研究を海外の研究機関とも連携して実施していくことにより、人文学分野ではこれまでになかった規模の国際共同研究ネットワークを構築するのが本事業の主な目的です。

また、研究の成果が積み重なっていくことにより、将来、異分野融合による新たな学術の領域の創出が期待できると考えています。

する我が国で最大唯一の、日本語の歴史的典籍データベースを構築するのです。収載するのは国文学分野にとどまりません。歴史や芸術などの人文学分野はもちろん、医学、科学など自然科学分野に及ぶ大規模なものです。

原本の画像を、データベースを通じて、質の高い状態で公開することにより、これまでは所蔵機関に向かかなければ確認できなかった事柄が、インターネット環境さえあれば世界中どこか

らでも確認できるようにになります。これにより、研究の飛躍的な発展が可能だけでなく、一般の方の日本文化に対する関心も高

まることが期待できます。このデータベースの構築は、日本文化の最も重要な遺産である古典籍の保存に役立つことでしょう。



古典籍共同研究事業センター紹介

古典籍共同研究事業センター副センター長

山本和明

計画の推進のため、国文学研究資料館に設置した、古典籍共同研究事業センター（以下、「センター」という）について紹介いたします。

1 センターの目的

事業の円滑な実施のため、各種委員会の審議を踏まえ活動計画等の策定等を行うほか、拠点等と密接に連絡を図りながら、事業を推進していく組織です。

の求めに応じて、総合的見地からの助言等を行う立場として、顧問を置いています。

(1) 研究組織

現在、センターには、専任教員4名及び研究員2名が配置されています(平成26年6月現在)。

特任教授 山本和明・中村康夫

准教授 北村啓子

特任准教授 金田房子

プロジェクト研究員 片岡耕平・井黒佳穂子

2 センターの組織

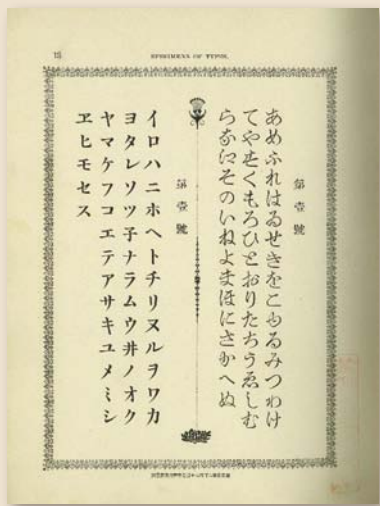
センターの組織は、センター長及び副センター長のもと、研究組織と事務部門の2つから構成されています。また、センター長

表紙紹介

表紙にあげた「ふみ」の文字が、すこし特徴あると思いませんか。この文字は資料館が所蔵する明治十二年六月刊行の『BOOK OF SPECIMENS』から集字したものです。奥付には「東京築地二丁目二十番地 活版製造所 平野富二」とあります。「Specimens」というのは見本のこと。この本はいわば活版印刷の見本帳で、明治初頭の活版印刷の技を窺い知るここのでできる貴重な書冊と言えます。今、集字したページの図版を掲げておくことにしましょう。

「SPECIMENS OF TYPES」つまり活字見本と上部にあり、「第壹号」活字としてひらがな、カタカナが並びます。下部には右から読んで「東京築地二丁目二十番地平野活版製造所」と記されています。奥付の人物のよつですね。この平野富二という人を皆さんはご存じでしょうか。弘化三年（1846）生まれの実業家で、石川島造船所（現IHI）の創立者です。幕府の長崎製鉄所機関手見習から身を起し、鑄造活字の日本の始祖である本木昌造にも師事した人物で、明治五年に築地活版所を創立し、鑄造活字製造及び印刷事業に成功するとともに、明治九年には石川島に民間事業としての造船所を創設するなど、明治を代表する実業家です。

活字をみてください。今通用する文字とはいくつか違いがありますね。版本の時代から活版の時代へ、その過渡期には書風の試行錯誤がなされていることに気がつかれます。「あめふれはるせきをこゆるみつわけてやすくもろひとおりたちつ多しむらなえそのいねよまほにさかへぬ」は、「雨降れば（ば） 堰関を越ゆる 水分けて 安く諸人



(2) 事務部門

センターの事務組織である古典籍共同研究事業センター事務局には、センター全般の連絡調整等を行うセンター管理係、データベース構築に関わる事務を行う古典籍データベース係が置かれています。なお、平成27年度には、共同研究の展開に併せ、古典籍共同研究係を設置予定です。

3 各種委員会

(1) 事業実施委員会

センターの管理運営に関する重要事項を審議します。

(2) 日本語歴史的典籍ネットワーク委員会

センターの運営に関する助言や、事業計画に関するモニタリング等を行います。

(3) 国際共同研究ネットワーク委員会

国際共同研究の推進に関することや、事業の広報に関することを審議します。

(4) 拠点連携委員会

国内拠点で実施する共同研究に関する事項や、データベース構築に関する事項を審議します。

以上の体制で、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業」を推進してまいります。

降り立ち 植ゑし群苗 その稲よ まほに栄へぬ」と、同じ文字のない四十七文字を詠んだ歌で、江戸時代の国学者本居宣長の作（『鈴屋集』巻五）なりました。（山本和明）

トピックス

TOPICS

イベント情報

「古典の日」 講演会

「古典の日」は、古典が我が国の文化において重要な位置を占め、優れた価値を有していることに鑑み、国民が広く古典に親しむことを目的として、平成24年3月に法制化されました。11月1日は、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い日時が寛弘五(1008)年11月1日であることから、この日に定められました。

日本古典文学の文献資料収集と研究を主事業とする国文学研究資料館も、「古典の日」の趣旨に賛同し、平成24(2012)年度から記念の講演会を催しております。

3回目となる今年度も、「古典の日」である11月1日に講演会を開催いたします。詳細は、9月頃に公表の予定ですので、当館ウェブサイトなどをご確認ください。古典に親しむ絶好の機会として、大勢の方のご参加をお待ちしております。

【開催日時】

平成26(2014)年11月1日(土)
13時30分～16時00分

【会場】

イイノホール(東京都千代田区内幸町二丁目)

【講演講師】

小川剛生(慶應義塾大学文学部准教授)
林 望(作家、国文学者、書誌学者)



※画像は昨年度ポスターのものです。

ふみ 第2号は、
平成26(2014)年
11月発行予定です。

ふみ

古典籍共同研究
事業センターニューズ
第1号

〈発行日〉

2014(平成26)年6月30日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

〒190-0014

東京都立川市緑町10-3

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>